

ふう けい き こう  
**風景紀行**  
**木曾越古道と**  
**三十三観音**  
 56  
 東濃森林管理署  
 (各署の景勝地等を紹介)

**木曾越古道と三十三観音**

〔東濃署〕 当署が管轄する加子母裏木曾国有林は、中津川市の北東部に位置する面積約四二〇〇鈔の国有林です。

江戸時代には、尾張藩の藩林として管理され、留山制度（木曾五木の伐採を禁ずる）により木曾ヒノキの群生地が守られてきました。

現在は、木曾ヒノキ備林や護山神社奥社など歴史的にも興味深い見どころがたくさんありますが、今回はその一つである「木曾越古道」をご紹介します。

「木曾越古道」は岐阜県の加子母から長野県の王滝へ抜ける古道で、その歴史は今から九百年ほど前まで遡ります。

当時は、御嶽山へ向かう主要な登山道として利用され、御嶽講の行者や信者が頻繁に往來していたそうです。

そしてその道中、加子母から長野県王滝村滝越地区までの間には観音様を刻んだ三十三体の石像が奉られていました。

この観音像は、文久二年（一八六二年）に

加子母の「林文三郎」、付知の「田口忠左衛門」が発起人となり、旅人の安全を願って木曾越峠の要所に道標として安置したものです。この古道は、昭和に入ってから利用されてきましたが、道路や鉄道が発達するにつれて次第に往來が途絶え、やがては観音像の行方だけでなく、そのルートさえも不明となってしまいました。

この美濃の国と信濃の国とを結ぶ歴史ある古道を復活させようと、平成十四年に地元有志が「古道木曾越峠と三十三観音研究会」を旗揚げし、木曾越峠のルート調査と所在が不明となっている三十三体の観音像の捜索を行ってきました。

研究会の熱心な捜索の結果、これまでに二十六体の観音像が発見されたものの、この四年間は、見つからない状態が続いていました。

ところが、今年の十一月に研究会と裏木曾古事の森育成協議会が協賛して「紅葉の『裏木曾の森』で三十三観音を探そうツアー」を開催したところ、新たに二十七体目が発見され、テレビニュースにも取り上げられました。行方不明の観音像は残り六体となり、同研

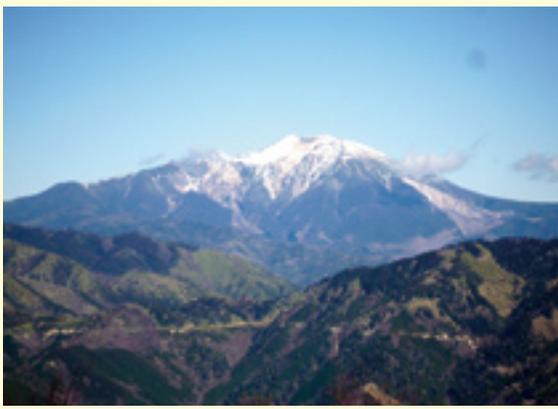


新たに発見された観音像

究会では、今後も捜索を行う予定です。発見されたルートは現在、加子母にある高時山へ登るアクセス道としても利用されており、道の脇では昔の風景そのままに観音像が登山者等の安全を見守っています。



昔の佇まいを現在に残す木曾越古道



高時山から望む御嶽山

◆アクセス

中央道中津川ICから国道三五七号線を経由して加子母へ  
 加子母総合事務所を横切り  
 (古道木曾越登山道入口) へ